

---

# MAGIC STAR

ソフィア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M A G I C       S T A R

### 【Nコード】

N 5 5 1 9 0

### 【作者名】

ソフィア

### 【あらすじ】

西暦    2 1 0 0 の地球

魔術士を目指す少女の物語

## 第1話 地球に迫る 大予言

目が覚めるような

美しい

蒼い銀河 地球

しかし、この地球に

最大の混乱と恐慌が訪れようとしていた

西暦 2100年

12月 24日 今年も残すところ

あと僅かな 年の瀬

人々は、クリスマスを

満喫していた

恋人達は 聖なる夜に

しばし 酔い痴れていた

だけでも

こんな 聖なる夜に

寂しい 女2人がいた

エメナルド 学園 3年生

ソフィア 18歳

同じく

ミラージュ 18歳

ソフィア「男なんてさどうせ。。。」

ミラージュ「ああ、私みたいなスーパー美少女をほっておくなんて、世間の男は、本当にバカね」

ソフィア「あんたのその自信たっぷりの性格少しは治せよ。」

ミラージュ「そう言えば、来年卒業ね。あんた、卒業したらどうするの??」

ソフィア「私は、サザンラークにある、魔術士の専門学校、ルモンド学院に、入学するわ。魔術士イチバン食える職業でしょ。今は」

ミラージュ「魔術士か、倍率高いけど、確かに、今の世の中、剣士か、格闘士か、魔術士の3つが主流だからね。」

ソフィア「それに、今は、まだ、魔族は、魔界から、人間界に入りこめるのは、時空の偶然の歪みなどでしか、ないみたいだけど、100年前に死んだ、予言者、アテネの予言書には、22世紀、人間界、魔界、冥界、天界が繋がってしまうと言ったことが書かれているみたいね」

ミラージュ「魔界の魔族が今以上、人間界に来たら、政府程度じゃ太刀打ちできないわね。」

ソフィア「ええ、父さんも、最近、手強い魔族が増えてきて、倒すのも大変だって。」

ミラージュ「私の家もよ。お爺様もお父様も、苦労してるわ。魔術連合協会も、頭を抱えてるわ。うちの力で、どうにかするしかないのよ。そのためには、まだまだ学ぶべきものがあるわね。」

ソフィア「あなたにしては、謙虚ね。いつもは、天才魔術士って自信過剰なあんたが。」

ミラージュ「それが、3日前、魔族数人がウチの近くで暴れていて、所詮、D級クラスの雑魚だと思ったんだけど、かなり危ない戦いだっただわ。お父様に援護してもらえなかったら、ヤバかった。」

ソフィア「そんなことがあったの。」

ミラージュ「うん。」

ソフィア「ミラージュ、邪気を感じる」

ミラージュ「近いわ」

その時だった、カップルが魔族に襲われた

ミラージュ「クリスマスにまで、お構い無しね」

ソフィア「警察が来るまでもたなそう。助けるわよ」

ミラージュ「まったく、だらしない男ね」

カップル「ひえー」

ソフィア「仕方ないはね。フレイムカッター（炎手裏剣）」

魔族は、フレイムカッター（片手に、オーラを集中させそのオーラ

を炎でコーティングし、手裏剣のように投げる。魔術士の見習い程度の初歩的魔術。」

により、息絶えた

ミラージユ「この分だと、アテネの予言あたっちゃうかもね。以上よ魔族の出方が。」

ソフィア「ええ。」

つづく



## 第2話 空からの使者

時は流れて、

西暦2101年

4月7日

ソフィアは、

サザンラークにある

ルモンド学院の入学式に  
出ている。

そして、親友ミラージュは、その有り余る才能により、VIP入学  
を果たしていた。

しかし、ソフィアもミラージュも、哀しげな顔をしていた。

1ヶ月前

B級中位の魔族が

ソフィア達の住む

アリーナ街を襲い

ソフィアの父

スターリン

ミラージュの父

キャリアル、祖父、ウィリアムが  
立ち向かい 殺された

アリーナ街には、剣士や魔術士が少なく、スターリン達含め数十名程度だった。

その魔族に

立ち向かおうとした

ソフィア、ミラージュだったが

スターリンに気絶さすられ  
安全な場所に避難させられていた。

目を覚まして、生き残った僅かな人から

当時の事を聞くと

スターリンとキャリアル  
の二人が、殺されて

ミラージュの祖父  
ウィリアムが

サンダー ブレイク  
(狂雷大爆発)

サンダーブレイク(狂雷を対象者目指し落とし、命中後、家一軒は、軽く消し飛ぶほどの大爆発を起こさせる雷系、中位クラスの魔術、使用者の精神力をかなり消費する)

を3発放ち、どうにか撃破したが

その代償は、大きすぎた

極度の精神力低下で  
高齢のせいもあり  
ウィリアムは、そのまま静かに息を引き取った。

ソフィア「もう1ヶ月か。」

ミラージュ「ええ。」

ソフィア「魔族をこのまま野放しには、できないわ」

ミラージュ「とりあえず、今日は、入学式終わったから、帰りましよう。私が天才魔術士でも、まだまだ魔族には、かなわない」

その時だった

とてつもない大きな地震

魔界から魔族が溢れかえってきた

ミラージュ「アテネの予言が、このままだと、いずれ、冥界の穴も時間の問題。天界も。」

ソフィア「なんで、時間が足りない。」

その時だった

B級クラスの魔族が現れた

ミラージュ「まずいわ、やるしかない」

ソフィア「フレイムカッター」

ミラージュ「効かないわね。サンダーカッター（雷手裏剣）」

サンダーカッター（雷系のフレイムカッターみたいなもの。雷系初歩的魔術。ちなみに、アイスカッター（氷手裏剣）も存在する）

ミラージュ「効かないか」

ソフィア「ファイアーボム（火炎手榴弾）片手にオーラを集めて、手榴弾のような大きさの、火炎球を造り対象者に投げる命中後、軽い爆発を起こす。魔力のない人間なら大火傷するが、魔術を心得ていれば、軽度の火傷または、無傷で済む。

ミラージュ「ダメだわ。こいつ強い」

ソフィア「ちくしょー」

その時だった  
現われたのは、

蒼い髪の毛の男  
金髪の男 2人だ

2人は

一瞬にして魔族を倒した

ミラージュ「あ、あんたら誰」

男らは答えた

蒼い髪の毛の男は、

フェイト

金髪の毛の男は

ロベルトと名乗った

ミラージュ「何故私らを助けてくれたの」

ロベルト「目的が同じだから」

フェイト「俺らは、天界からやってきた。」

ミラージュ「天界??」

フェイト「ああ。おそらく、わが世界に伝わる伝説で近日、人間界、天界、魔界、冥界が繋がると言った予言が当たったのだ」

ソフィア「あなた達の世界も。」

ソフィアは、アテネの予言のことを詳しく話した

フェイト「なるほど、で俺たちが来たのは、冥界の王、冥王と魔界の王、魔王をそして、わが世界の天界の王、天王を倒すため」

ミラージュ「冥王と魔王は、わかるけどなぜ、あんたらの世界の王、天王まで」

フェイト「それは、天王、アレキサンドリアの欲望のために、天界は、今壊滅状態。アレキサンドリアは、自らが魔界、冥界を制圧し、この美しき蒼い銀河地球がある、人間界に移住しようとしている。そのために、邪魔な低力者の天族を殺しまくり、生意気な犯行者も全て殺した。俺の家族も、ロベルトの家族も。それで奴の目を盗み、広がった穴から人間界に来て、一緒に戦えそうな仲間を探していたんだ」



ロベルト「お前らなかなか、強い魔力感じるからな。」

ミラージュ「要するに、あんたらは、アレキサンドリアを倒したいのね。」

ロベルト「ああ、そして、冥王ダビデ、魔王アークを倒して、体内にある、魔玉を手に入れ、3つの魔玉の力で、混乱と恐慌を静める。さすれば、元通りになるそう、印されていたんだ、この天聖知性書に。」

ミラージュ「つまり、3人の王を倒すことが、この世界の混乱を静める唯一の方法なのね。」

つづく

### 第3話 天界仙人 ジョバイロ

ロベルト「ああ。そうだ。」

ミラージュ「ソフィア、やるしかないわ。」

フェイト「しかし、今の、君らでは、強い魔族に対抗できない。したがって、一度、天界に来てくれ。天界の天王アレキサンドリアは今、精神集中のため、瞑想している。そのスキに、天界の仙人、ジョバイロを連れてくる。」

ロベルト「ジョバイロは、高齢で残りの寿命も僅かながら、驚異的な魔術の持ち主。しかし、アレキサンドリアと戦えるほど力は、残っていない。さあ、お喋りは、あとだ。行くぞ。」

フェイト達は、ソフィアとミラージュを連れて、時空間が歪み出来た穴に飛び込んだ

ミラージュ「ここが、天界ね。ひどいわ。こんなに荒れ果てて」

ロベルト「とりあえず、俺に捕まれ。3人を運ぶには、かなり精神力を使うが、なんとか行けるだろ。テレポ（瞬間移動）」

テレポ（瞬間移動）とは、  
一度見たことある場所を  
イメージすることにより  
その場所に移動できる

ただし、時空間の移動は、できない。（人間界から魔界へ行くなど）

距離は、術者により大きくことなり

達人は、1000キロメートル以内なら移動できると言う

一度に運べる人数は、

達人でも7、8人が限界であり、人数が多くなれば

当然移動距離も減少する

また、精神力をかなり消費してしまう。

ロベルト「ふうー着いた。この術は、しんどいぜ」

ソフィア「ここに、ジョバイロさんがいるのね」

フェイト「ジョバイロ仙人」

フェイトが呼ぶと

現われたのは、白髪の髭を蓄えた、老人だった

ジョバイロ「フェイトか。ロベルトも。して、何用じゃ」

フェイト「この娘達を、強くして欲しい。」

ミラージュ「お願いしますジョバイロさん」

ソフィア「お願いします」

ジョバイロ「娘よお前らは、人間だな。」

ソフィア「はい。地球に住む地球人です」

ジョバイロ「魔術は、多少心得ているみたいじゃな」

ミラージュ「はい。天才と呼ばれてます。」

ソフィア「あんなね」

ジョバイロ「ほう。して、どのくらい強くなりたいんじゃ」

ミラージュ「そんなの、一番に決まってるわ」

フェイト「お願いします。アレキサンドリアが瞑想を終えるのも時間の問題。とりあえず人間界へきてくれ」

ジョバイロ「できん。ワシは、天界仙人ジョバイロ。他の異世界には、いけん」

フェイト「そんな。」

ロベルト「たのむぜ。」

ジョバイロ「魔玉を集めることについては、賛成じゃ。しかし、ワシは、いけない」

ロベルト「なら、どうすれば」

ジョバイロ「簡単じゃ、この世界で修業させる。この娘らは、強くなるからな。」

ロベルト「だけど、時間がないぞ」

ジョバイロ「アナザールーム（異空間部屋）なら、1日が半年分あ

る。つまり2日で一年間分修業できる」

ミラージュ「それって、一年歳食うつてこと。いやーあ、この天才、美少女ミラージュが。オバサンに近づいちゃう」

ソフィア「ミラージュ、今は、そんなこと言ってられないわ。」

ジョバイロ「当たり前じゃ、バカ娘が。それとフェイト、魔王についてじゃが。ワシが調べた内容によると、アレキサンドリア、魔王アークは、体内に入ってるらしく。その魔王を手にし、吸収できたものは、伝説魔術を、得られるみたいじゃ。」

フェイト「冥王ダビデの魔王は。」

ジョバイロ「ダビデの魔王は、出し入れが自由であるみたいと書いてあるだけで、詳しくは、わからなん。」

フェイト「冥王ダビデ、謎に包まれているな」

ジョバイロ「さて、ソフィア、ミラージュ、いくぞ」

こうして、ソフィアとミラージュが

アナザールームに入って

2日が経った

フェイト「ヤバイ、アレキサンドリアの邪気を感じる。瞑想を終えたか。まずいぞ。早く人間界に戻らなくては。」

ロベルト「ソフィアとミラージュは、まだか。」

その時だった

ソフィア「お待たせ。」

ミラージュ「ごめんね。てか一年で超胸出できた。うーん私ってセクシー」

ソフィア「変わらないよー胸。」



ジョバイロ「まずいの。アレキサンドリアが。凄いスピードで向かってくる」

フェイト「ロベルト。テレポだ」

アレキサンドリア「させぬ。私が瞑想しているうちに、いろいろやってくれたな」

フェイト「まだ、何もしてねえよ」

ロベルト「ちつ。みんな捕まれ」

アレキサンドリア「デスボール（死の魔球）」

ジヨバイロ「ロベルトいけ。ワシが、時間を稼ぐ。ライティングウォール（光の壁）」

デスボール（死の魔球）

アレキサンドリアの放つ

天界魔術の一つ

サッカーボール程度の大きさだが、街一つを消し飛ばす威力

アレキサンドリアは、

共通魔術

（フレイムカッター、アイスカッターなど） 人間界にある魔法を基本的に共通魔術と呼ぶ。

天界魔術は、天族または、天界で鍛練した、人間、魔族なども得ることができる

他にも、冥界魔術、魔界魔術などがあり、同じ理屈で成り立っている。

ライティングウォール（光の壁）

天空魔術の一つ

防御系天空魔術の中では、最強の防御魔術

強力な、冥界魔術や共通魔術なども、かき消すことのできる魔術

アレキサンドリア「舐めるなよジョバイロ」

ジョバイロ「メガフレア（火炎の大爆発）」

メガフレア（火炎の大爆発）

共通魔術の炎系最強の部類の一つ。

超灼熱の火炎が大爆発を起こし  
対象者を 焼き尽くす

ロベルト「テレポ（瞬間移動）」

フェイト「よし、人間界へいくぞ」

ソフィア達は、どうにか人間界へ行った

ジョバイロ「はあはあはあ。」

アレキサンドリア「やはり、老いたな、こんなものがメガフレアだと。笑わせるな。メガフレア!!」

ジョバイロ「な、なんじゃと、ライトニングウォールが。ぐうわあ」

アレキサンドリア「ふん。逃がしたか。しかし、私が人間界に行けば済むこと。その前に、アークとダビデの始末が先か、そして、奴らの魔玉を頂く。我が王となる日も近いな」

つづく

## 第4話 いざ冥界へ

ソフィア「イテテ」

ミラージュ「人間界のようね。」

ロベルト「アレキサンドリアがすぐ追ってくる。とりあえず、冥界に行こう。魔界よりは、若干安全だ。そして、ダビデを倒す」

フェイト「そうだな。おそらく穴は、北西に広がってる。」

ミラージュ「これが、私達の世界、人間界なの、酷すぎる。原型がもはや、ない。沢山の人が死んだ。」

ソフィア「ミラージュ、いくわよ。私達がやるしかない。そして、早くもとの平和な人間界に戻して、学校行こうよ。」

ミラージュ「そうね。」

ロベルト「北西なら、多分わかる。テレポ。」

ロベルトのテレポにより

冥界の穴まできた

ソフィア達は、穴に飛び込んだ

ソフィア「ここが冥界。ダビデは、どこに。」

ロベルト「ジョバイロ仙人の書いてくれた、地図によると、暗黒都市シャバンナに聳える、シャバンナ城、最上階にいるみたいだ。」

ロベルト「見たことないから、テレポは、使えないが。そう遠くない。」

フェイト「いくぞ。と言いたところだが、まずは、邪魔な冥界族を倒さないとな」

冥界族の群れ「立ち去れ、異世界人め。うらあー」

ソフィア「フレイムカッター」

ロベルト「アイスカッター」

ミラージュ「サンダーカッター」

ソフィア達の攻撃で



冥界族は、消し飛んだ

ソフィア「急ぎましょう」

フェイト「フレイムカッターだけで、わかる。ソフィア、お前、相当魔力を上げたな。ミラーージュもだ。」

そして、ついに暗黒都市シャバンナに着いた

ロベルト「城だぜ」

フェイト「ちっ、門番か」

門番「貴様ら、異世界人だな、死にきたのか。」

ソフィア「違うわ、あんたらのボス、冥王さんの首を取りに来たわ」

門番「けっけっ、身の程を知れ。ブラックビーム（暗黒光線）」

ブラックビーム

冥界魔術の一つで

冥界族の下級クラスがよく使う魔術であり

共通魔術で表すと

サンダーカッター、フレイムカッターなどと並ぶ威力。対象者が強力な魔術士の場合傷すら負わない

フェイト「消え失せろ、アイスカッター」

門番「がきっ、うっわ」

ソフィア「ファイアーボム」

ソフィアのファイアーボムでフィニッシュした。

ロベルト「いくぞ。」

しかし、一階には、ダビデの部下がいた

トリフ「俺に勝てば、上に行かしてやる」

ソフィア「おもしろいわ」

ロベルト「俺がやろう。」

ミラージュ「ロベルト」

トリフ「金髪君、君が相手が、魔術は、多少しか使えないみたいだ

ね。本質は、格闘士タイプだろ。」

ロベルト「ご名答、だが、魔術は、できる範囲取得した。」

トリフ「いくぞ」

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5519o/>

---

MAGIC STAR

2010年11月2日12時50分発行